

は し が き

センター長 江 口 修

2000年は新体制で臨むものと思っておりましたが、4度センター長に選出され、2000年そして21世紀の幕開けである2001年も長として迎えることとなりました。課題山積の新ミレニアムではありますが、関係各方面ならびに関係諸氏のご協力を得て難局を乗り切っていきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

ところで1999年は大学激動の幕開けを告げる年と将来記されることになるかも知れません。ただ個人的には国立大学の設置形態の検討が「独立行政法人化」一点に絞られて論議されているのは若干納得行きません。ともあれ大学の将来像を見据えた本格的議論が広範に引き起こされるべきであることは言うまでもなく、それに向けてわれわれも努力しなくてはなりません。幸いにして平成11年度の補正予算において、情報処理センターと協議を重ねてきた多機能校舎がCBCを含んで5階建ての建物として認められました。従来の枠にとらわれない柔軟な発想でもってIT革命の時代を担う外国語教育のハードとソフトを構築し、この新しい施設をフルに活用しなければなりません。

さて本センターの1999年を振り返ってみますと、主だった成果として昨年に引き続いて各種語学検定試験での本学学生の成績が着実にアップしたこと。ヨーロッパ方面の交換留学協定締結校としてフランスのエクス＝マルセイユ法・経・科学技術大学が加わり、留学というモチベーションがいっそう高まったことにより、いわゆるやる気のある学生が増えてきたことがあげられるでしょう。ミュンヘン－札幌姉妹都市提携記念ドイツ語暗唱大会で本学学生が一昨年に続いて優勝したことも、こうした傾向が着実に浸透しつつあることの証左だと思われまます。まだまだ商大生は伸びる可能性を持った優秀な人材であると誇ってよいのではないのでしょうか。もう一つは商大の将来を見据えた平成13年度より開始されるカリキュラム改革に合わせた語学カリキュラムの改革を成果として挙げたいと思います。新カリキュラムの根本理念は、ベーシックな部分においても能力に応じた対応を取り、伸びる部分には高度な対応をなす、という2面性に立脚した効率的なカリキュラムの展開です。英語はこれからも国際語のトップとしてますますその重要性を増すと思われまます。新カリキュラムでは英語について能力別クラスをその評価システムの厳密化を含め導入することになりました。他の外国語についても2年次以降では基本的に同じシステムを取り入れることにしています。もちろん文部省も積極的に進めようとしている各種資格試験の成果の活用も視野に入れていきます。能力別クラスと厳密なプレースメント方式の確立により、本学学生の語学能力は外部から見てもクリアになります。単に必修だから取るといった消極的な対応から、将来を見据えた語学学習の位置づけを学生が真剣に考えるようになることが期待されまます。

つぎに本センター教官の消息をお知らせしておきましょう。豊国先生および北大に転出された津曲教官の後任として羽村貴史先生ならびに佐藤彰先生をそれぞれ助教授としてお迎えすること

ができました。お二人とも将来を嘱望される少壮気鋭の若手研究者です。これまで人事の動きの少なかった本センターはお二人の赴任により一気に若返った感があります。そして外国人教師としてマーク・ホルスト先生を北海道大学より呼び出すことができました。フルスタッフ状態で研究教育にいいよ盛り上がり期待できそうです。その他人事としては、個別言語部門英語系の山本久雄助教授が教授に昇任されました。

さて教官の海外渡航ですが、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国オレゴン州立大学で研修されていた応用言語部門の高井収教授が一時帰国の後引き続き平成12年度1年間同大で研修を続けられることとなりました。また、平成12年3月より1年間裴教授が小樽商科大学後援会助成金によりアメリカ合衆国カレッジ・オブ・ウィリアム&マリーにて米国における中国語を中心とした外国語教授法の研修を行われる予定です。その他本センター教官の海外渡航は相変わらず盛んで主立ったものを以下ご紹介しておきましょう。まず、外国人教師マーク・ホルスト先生が平成11年7月24日より9月3日までの間連合王国エジンバラ大学において社会言語学に関する資料収集にあたられました。個別言語部門英語系の大島稔教授が日本学術振興会基盤研究A「先住民による海洋資源の利用と管理：漁業権と管理をめぐる人類学的研究」による「ロシア極東カムチャツカ半島における海獣および魚類の利用、管理および所有の調査」のため、8月7日より9月30日まで、ロシア連邦カムチャツカ州アチャイヴァヤム及びアプカ村周辺に出張されました。おなじく、個別言語部門英語系の吉田直希助教授が同年8月26日より9月28日までアメリカ合衆国ハーバード大学およびスタンフォード大学において18世紀英文学研究及び現代アメリカ文化研究に関する資料収集を行われました。応用言語部門下村五三夫教授が8月18日より9月29日まで、第三回国際B.ピウススキ・シンポジウムでの研究発表をメインに、カルパチア、バルト地域での口琴の調査でポーランド、リトアニア、スロヴァキアを回られました。さらにロシア語系のスベヴァコフスキー助教授が8月22日から9月9日までポーランドで、ドイツ語系の大塚譲教授がドイツ連邦共和国、ゲーティンスティテュート、パイロイト大学、ベルリン自由大学で研修されました。ロシア語系の匹田剛助教授が夏季短期海外語学研修先の新規候補調査で8月24日より9月10日までロシア連邦共和国、モスクワ、ペテルブルグ大学等を訪問されました。さらに下村五三夫教授は平成11年12月15日より平成12年1月16日までポーランド、同国立アダム・ミツケビッチ大学において講義をされたほか研究資料の調査収集にあたられました。平成12年3月には英語系小林敏彦助教授がTESOL世界大会での研究発表とワークショップへの参加でカナダ、バンクーバーに出張される予定です。

これからはいいよ大学の将来像を中心にかなり困難な議論が要求されることでしょう。しかし将来の姿も日々の教育実践と研究の積み重ねの中から見えてくるはずで、また学問の本質もそこから浮かびあがってくるものに違いありません。いたずらに差異化を求めて議論の中心を見失うことのないようにしたいものです。